

「サイボーグ・ブルース」 平井 和正 著 早川書房 1971年12月

昔、あるスポーツを楽しんでいましたが、目の前で見る黒人選手達の身体能力の高さには、大いに劣等感を掻き立てられていました。アメリカでは、なぜそこに住んでいるのかという悲劇的なルーツを理由に、多くの黒人の方々が苦しんでいます。本作品で、主人公は勇敢で優秀な男性の黒人警官でした。そして、犯罪者に銃撃されて死んでしまいました。しかし、優秀な警官が欲しかった警察当局により、軍用サイボーグ体への脳移植が行われました。そして、そのサイボーグ体は生前の黒人青年の姿でした。本作品は、映画「ロボコップ」より、かなり前に発表されています。

さて、機械やコンピュータと聞いて、嫌悪感を持つ高専の学生は少ないと思います。テレビの子供番組ではサイボーグのような主人公がよく出てきますから、ヒトが機械製の体を持って動くサイボーグという言葉にも違和感はないと思います。では、あなたの脳の小片がサイボーグ体に入れられたとしましょう。耳や目や、他の感覚器官はセンサーで、体は優秀な機械製のロボットで、神経は電線です。ただし皮肉にも外見だけは生前の、人間の姿を保っています。主人公も、本当の悲劇は、苦勞の果てにサイボーグ体に慣れてから始まると言っていますが、人間だった自分が、生きたまま、人間でなくなるというのは大きな衝撃ではないでしょうか。

物語では、世界最強の軍用サイボーグの体を持ちつつ、人間の気高さ、弱さも持ち合わせた黒人青年の苦悩が描かれますが、最後は超能力を持つ集団の話になります。主人公と対するのは、警察の警備ロボット、サイボーグの不良少年グループ、悩める殺し屋サイボーグ、実は悪の組織に属していた昔の警官仲間（人間爆弾）で、サイボーグになる前の恋人は囮に使われ、会いに行った彼は囚われます。とにかく無敵のサイボーグ警官が、闇と狂気に彩られた相手に、人間としての感情を持って立ち向かいますが、負けそうになることもあります。

作中、サイボーグになり魂を失った自分には歌えないと思い込んでいたブルースを、人間にそっくりなアンドロイドが歌います。ロボットに魂のこもった歌を歌わせるのは、プログラミングの天才だったらできるかな、と考えますが、そのような天才が作った機械人形を、人間の女性と勘違いして、主人公が恋をしてしまうのは、切ない話でした。軍用サイボーグですら見抜けないものを作る技術力は、悪魔のような技です。そして、補助電子頭脳に囲まれた脳の切れ端しか人間の部分がない主人公でも、美しい女性には魅入ってしまう男の業からは逃れられないといった人間らしさを示しています。美しい蓮（はす）の花が汚い泥の中で咲くように、手ごわい犯罪者相手の闇でもヒトとして輝くサイボーグ警官の話は、技術偏重の傾向がある高専生にも読んでほしいと思います。

最近私は、ライトノベルと呼ばれる異世界やファンタジー世界の本を読むことが多いです。しかし残念なことに、この「サイボーグ・ブルース」のような読みやすい文章、奇抜な視点、物語として完成度の高い起承転結があり、文字情報だけであるのに状況が頭に浮かぶような文章力を伴う作品には、なかなかお目にかかれません。本作品は1971年に出版された作品ですから、すでに半世紀が経過しています。もし作者の平井和正氏が生きていたら、現代ライトノベル作家の力量の無さを嘲笑し、かつ憂いていたことでしょう。「おまえら、それでもプロか」と。

最後になりますが、現代では許されない差別的表現も少し出てきます。古典作品（50年前）なので、どうか許してあげてください。